

オラーンムチル現象にみる内モンゴル・インパクト

シンジルト

1. はじめに

オラーンムチル (ulaGammOci) は、一九五〇年代、内モンゴルで誕生したアマチュア文芸団体の名称であり、モンゴル語で「赤い(オラーン) 小枝(ムチル)」を意味する。もちろん、枝の色が必ずしも赤ではないことを多くの人は知っている。あえて「赤い」という語を用いたのは、革命や社会主義の象徴だからだろう。しかしながら、社会主義国家建設のための運動体であると同時に、オラーンムチルは多くのモンゴル人にとって、「マナイ(我々の)オラーンムチル」と親しく呼ばれてきた身近な存在である。

他方、漢語では「烏蘭牧騎 *wulannuqi*」という当て字が使われる。「烏蘭」は「オラーン」の単なる音訳であるのに対して、「牧騎」は「ムチル」の音を表すと同時に、「牧畜民」と「騎馬」の意味も含む。また現に「社会主義文芸軽騎兵」と意識もされていることを考えれば、馬に乗って社会主義を実践する牧畜民というのが、「烏蘭牧騎」の字義になろう。

ここでまず描き出したいのは、内モンゴル自治区から発生したこの名称をめぐって、国家と地方、内モンゴル

自治区のモンゴル族、自治区以外のモンゴル族、そしてほかの少数民族、さらに漢族の人々が、階級、年齢、性別を問わず、半世紀間様々な社会ドラマを演じてきたという事実である。この社会現象を、「オランナムチル現象」と本論で表現する。

本論のもうひとつのキーワードである「内モンゴル」という語は、地域を指す一方で、民族名である「モンゴル族」とも重なり合う。しかし、「内モンゴル」では、モンゴル族は総人口の一割程度にすぎない。観光化が進むにつれ、「モンゴル族文化」を名乗って続々と登場する諸々の現象に対して、民族文化の繁栄だと魅了される者もいれば、まがい物として幻滅する者もいよう。従って、「内モンゴル」という語には、内モンゴル自治区一一八万平方キロの物理的空間や二三六〇万人住民だけではなく、「無限に広がる大草原に少数民族の代表格モンゴル族の遊牧民が暮らしている」といった人々のイメージも含まれている。

一六四八年に締結されたウエストファリア条約を契機に、近代国民国家の理念、つまり一国家を構成する国民は同じ民族であるべしという理念が形成された。均質的な国民を欲す国家にとって、内部の各民族の自己主張は脅威であり、その一方で「民族文化」は統合のために利用可能な資源を提供する。こうした民族の二面性を踏まえ、国家は最初から民族の存在を認めない場合もあれば、民族の存在を認め、それらを国家秩序のもとで管理することを通じて統合を達成する場合もある。中国は基本的に後者である。近代中国の歴史において、国家と民族の利害が折衝して生まれた結果が、「民族区域自治」という制度（及びそれに伴う政策）である。この制度では、国家からの民族の分離独立を認めない一方、諸民族の繁栄は国家の繁栄と見なされる。何らかの国家の意志に適合すべしとの前提の上で、諸民族の文化的主体性が強調される。諸民族の文化的主体性を強調することによって、この制度は強化される。こうした文化的主体性の供給源のひとつが、内モンゴルである。

中華人民共和国より二年早く誕生した内モンゴル（自治区）の生成と変容の過程は、中国の民族政策の確立、

変遷の軌跡を象徴するものである。そして内モンゴルにおけるモンゴル族は、中国モンゴル族の民族的カテゴリーの基準点となり、自治区外のモンゴル族の社会的文化的特徴づけに深く関与した。さらに、内モンゴルは少数民族区域自治の模範としてその他の少数民族地域に大きな影響を与えてきた。言い換えれば、内モンゴルは国家にとつて、政治的には模範的な自治区、民族的には模範的な少数民族、文化的には模範的なモンゴル人といった理想像を演じてきた。内モンゴルが外部に与えてきた一連の影響を、「内モンゴル・インパクト」と呼ぶ。内モンゴル・インパクトをより明確に表現してきたのは、内モンゴルを発信地とするオラームチル現象だと筆者は考える。本論では、オラームチルの生成、それをめぐる人々の解釈の変遷過程を分析しながら、内モンゴル・インパクトの意味を考えてみたい。

2. 赤い小枝から巨樹へ

2-1. モンゴル族舞踊と芸能団体

次のセリフは、二〇〇五年四月二十八日の中国中央テレビCCTV-10のプロローグからのものである。「多くの人は、モンゴル族は生まれつき歌や踊りの上手な民族だと思っ**て**いるだろう。しかしながら、事実、私たちが今日、舞台上で観るほとん**ど**すべてのモンゴル族舞踊の基本動作は、一人の満州人によって作り出されたのである。彼は、わが国のモンゴル族舞踊の基礎を築いた**賈**作光 [Jia Zuoguang]⁽¹⁾である」【央视國際 2005】。

番組に生出演した賈は、一九二三年に瀋陽で生まれ、十五歳で満州映画協会の少年ダンス・チームに入り、石井漠の門下で現代舞踊を学び、終戦後は舞踊家呉曉邦の⁽²⁾ところで学んだ。一九四七年二十四歳の彼は呉とともに、



写真1 「雁舞」を踊る賈作光
出典：[中華人民共和国国家民族事務委員会 2006]

いう呉の言葉を信じ、努力の末「モンゴル民族が納得する現代の代表的な舞踊家になった」[王曼力 2002]。やがて彼は、内モンゴルの生活に溶け込み、生活に密着した「牧馬舞」や「雁舞」(写真1)などを創作し、人気を集めた。さらに、オルドス地域に赴き、チャムの踊り方に基づいて、「オルドス踊り」を創作した。これに關して彼はいう。「当時ラマたちが踊っていたのは、とても弱々しくて、パワーがなかったが……、私はそれを力強いものに変えた。陽気さを加えることで、強いリズム感を増していった。力に満ちた荒々しさがあり、健康的で向上的なのだ」。

賈によるとこの踊りが、後に「これこそ本物のモンゴル族舞踊」といわれ、モンゴル大衆に受け入れられたという。そこで、司会者は質問した。「多くの人は、こういった動作〔肩を柔らかく動かしたり強く動かしたりするなど〕は、モンゴル族の伝統的なものだと思いますか、あなたはどうか思いますか」。

設立されたばかりの内モンゴル自治区にわたった。
賈は当初、現地の生活に適応できなかっただけでなく、モンゴル人のラマ僧の宗教的な踊りであるチャムをみても怖がったという。彼は「この民族をより深く愛することができれば、お前の創作と演技は真実に最も近づくのだ」と

彼は答える。「いいえ、それは私が生活の中から、抽出したものだ。それは記号だ。馬に乗っていれば肩が柔らかに動くのだ」。

司会者…「もともとモンゴル族にはこういった踊りがなかったということですか」。

賈…「なかった……。だが、それから半世紀も民衆の間で流行った結果、いまや、誰が見てもモンゴル族の踊りになっているのだ」。

司会者…「それなら、ひとつの誤解を晴らすべきでしょう。ほとんどの人が、モンゴル族がもともと歌も踊りも得意な民族だと思っていますからです」。

賈…「確かに内モンゴル人は歌が好きで、モンゴル族は歌の民族というべきだろう。しかし、踊りに関しては必ずしもそうではなかった。……」。

司会者…「ということは、これらの踊りの動作は、あなたが舞台に登場させたのですね」。

賈…「……おそらく太古の時代においても原始舞踊があっただろう。しかしそれは、舞台には登場しなかった。舞台に登場したのが、その時からだった」【*中央視国際 2005*】。

このように内モンゴル文工団（文芸工作団の略称）に奉仕していた賈は、上記以外にも「蒙古舞」、「献花舞」、「馬刀舞」など数多くの作品を残し、「近代モンゴル族舞踊」の基盤を築いた。賈の作品がさまざまな芸能団体に受け入れられ、一般民衆にまで普及していったからである。とりわけ、牧畜民と直接触れ合う機会の最も多いオラームチルにおいて「賈作光の踊りは、常に上演される十八番になった」【*中央視国際 2005*】。しかし賈が所属していた文工団とオラームチルとは近いながらも異なる芸能団体である。ここで、両者の関係を整理しておきたい。

内モンゴル文工団は自治区誕生以前、一九四六年四月一日に張家口市で成立した。その基盤は、晋察冀や延安から東北へ工作活動を展開するため張家口市に滞在した共産党の文芸幹部と、張家口市にあった内モンゴル軍政学院のモンゴル族や満州族の学生だった。内モンゴル文工団は、一九五三年に内モンゴル歌舞劇団に、一九五六年に内モンゴル歌舞団へと名称を改めた。設立当初の背景や後の展開、あるいはこれまでに演じた社会的役割から分かるように、文工団そしてその発展形である歌舞団はエリートによる芸術専門団体であり、純粹芸術の側面では、オラーンムチルに対して指導的な立場にある。さらに、二〇〇〇年には内モンゴル歌舞団をベースに誕生した「内モンゴル民族歌舞団」は、内モンゴル自治区で最大の専門芸術演出団体とされている〔美麗其格 1992a, b; 王曼力 2002; 『蒙古芸術』 2003〕。

専門性、制度性、権威性をもつ文工団および後の発展形態との比較において、オラーンムチルは大衆性を特徴とする。「近代モンゴル族」の踊りや歌などをモンゴル地域の末端にまで浸透させ、牧民などモンゴル族大衆に「モンゴル族芸術」に関する知識やイメージを深く根付かせたのは、オラーンムチルのほうである。そういう意味で、オラーンムチルは民族文芸の普及に寄与したボランティア団体ともいわれる。そして、文工団が名称をたびたび変更してきたのに対して、オラーンムチルは一貫してその名称を保ってきた。

2-2. 赤い小枝の誕生

オラーンムチルが設立された一九五七年は、内モンゴル自治区設立十周年にあたる。自治区の創始者であるオラーンフ（烏蘭夫）が、同年四月三十日、「十年来の内モンゴル」との題で講話を行なった。そこで、「経済や文化領域の建設事業において、かつて発生し現在も存在する主な問題は以下の通りである。周密で体系的な調査研

究が欠如したがゆえに、一部においては、党と国家の全体方針と政策を実施する際に、「内モンゴルの」民族的、地域的な特殊事情を十分に考慮せず、しばしばほかの地域の経験をそのまま踏襲してしまう偏向があるということである」と述べた〔烏蘭夫 1957: 461〕。

当時オランムチルの設立に直接関わったA氏（男性、七十代）は、オランフの講話を次のように解説する。「何でも内地のまねをしてはいけない。内地には文化館があった。しかし、われわれはそれで満足してはいけない。牧畜地域の住人は、踊りもみられない、歌や音楽も聴けない、何も娯楽がない。こうした内モンゴルの実情に合った、新しい形での文化宣伝チームが作れないかという指示だった」。

ここでいう「内地」とは、少数民族居住地域を除くいわゆる先進地域つまり漢族地域を指す。文化館とは、内地の経験を踏襲して「内モンゴル牧畜地域や半農半牧地域における大衆の文化生活を活性化する目的で、一九五七年までに設立された」組織またはその施設を指す。しかし、文化館の問題は「牧畜地域や半農半牧地域の現場に足を踏み入れ、本来の任務を着実に遂行することができないでいた」という点にあった〔内モン自治区文化庁 1997: 80〕。オランフの講話は、こうした問題点を意識したものであった。

講話直後、自治区文化局は牧畜地域で調査実験を行なうことを決定した。具体的には、「シリントン盟の西スニト旗、正蘭旗、正鑲蘭旗やオランチャブ盟の達茂旗などの地域に調査団を派遣し実態把握を図った」。その結果調査団は、「装備軽量で移動性に富んだコンパクトな組織形態、一人で多様な役割を果たせるメンバーで構成されたチームを設立する必要性を認識した」という。同時に、「社会主義的な文化芸術を農牧民の生産生活の第一線に直接かつ持続的に届けるには、このようなチームしかない」と新しいチーム設立の重要性を強調した〔内モン自治区文化庁 1997: 80〕。

しかし、新しい形態のチームにどのような名を与えるかについては、関係者は約一ヶ月の時間をかけ、検討を

繰り返したという。A氏によれば、「当時、モンゴル人民共和国には、オランブロン（赤いコーナー）⁽³⁾というものがあつた。それはわれわれにとつて一つの参考になつた。しかし、組織の性質は完全に異なるため、西スニト旗に赴いた調査団メンバーが牧畜民たちと意見交換しなければいけなかつた」。そこで、一部の人が「オランブチル」という案を示し、最終的にはこの名称で決着したという。「もし、プロレタリア革命全体を巨樹とすれば、文芸事業はその枝となるが、牧畜地域で生まれたこの文芸チームは、その枝からさらに派生した小枝なのだ」〔内蒙古自治区文化庁 1997: 80〕という序列関係を考慮して生まれたのが、この控えめの名称である。

最初のオランブチル実験が、一九五七年五月二十八日から六月十七日まで西スニト旗において行なわれた。自治区文化局の七人による調査団は、新しいチーム建設の仕事を指導した。当時西スニト旗の文化館の業務範囲は限られており、とりわけ牧畜地域に赴いて、公演することはなかつた。そのため、文化館の職員（三名）に、踊り、歌、演奏の才能のあるメンバー七名（役員三名、牧畜民三名、小学校教員一名）を加えて、総計十二名（内二名は運転手）を組織して、牧畜地域に一ヶ月くらい滞在した。そこで、「化粧する方法を初めて覚えながら、隊員たちは牧畜民に物語、踊り、歌や漫才など演技を披露した」ようであつた〔内蒙古自治区文化庁 1997: 81〕。

一九五七年六月十七日、西スニト旗文化館において、オランブチルの正式設立を祝うセレモニーが行なわれた。九月五日に開かれた自治区牧畜地域文化事業会議で、自治区文化局は西スニト旗オランブチルの経験を紹介し、その普及を促した。さらに内モンゴル政府は「オランブチル事業条例（草案）」を批准した〔内蒙古自治区文化庁 1997: 81-2〕。

同条例の第一条「オランブチルの性質、方針と任務」の中核部分は二つの段落によつて構成される。第一段落では、「オランブチルは牧畜地域において民族的な大衆文化活動を展開し、大衆の民族的文化生活を活性化するために〔自治区〕政府が設立した総合的かつ末端の文化組織である。同組織は、民族的な特徴に富んだ文化

宣伝方式を用い、牧畜地域を巡回しながら牧畜民に対してサービスと公演を行なうと同時に、民族の文化遺産を継承し発展させることで牧畜民の文化的ニーズを満たしていくことを目指す」とオラーンムチルの基本的な性格と活動方式を位置づけた〔内蒙古自治区文化局 1957: 235〕。この段落からは、まず、そのサービスの対象が牧畜民であること、つまりオラーンムチル自体は牧畜地域で設立すべきとのがわかる。そして、「民族的」な活動方式が強調され、「民族文化」の伝達も言及されたことが見て取れる。

上の段落とほぼ同じ分量で書かれた第二段落はオラーンムチルの任務を規定した文言である。その内容は「オラーンムチルは、牧畜地域の政治的経済的な現状に合わせ、牧畜地域の民族的な特徴に基づき、社会主義思想、そして党と政府の政策や法令を適時に宣伝することで牧畜民の政治的覚悟を高め、……自治区の新しい社会主義的民族文化を建設し、かつ発展させていくべきである」とある〔内蒙古自治区文化局 1957: 235〕。表現の強さからみて、この段落がいわゆる社会主義リアリズムの「形式においては民族的、内容においては社会主義的」というものを彷彿させる。

しかし、第一段落との配置関係や分量配分からみて、第二段落は際立って突出したのではなく、当時としてはむしろあつて当然の文言であつた。牧畜民の余暇が単調である問題を改善していききたいというのがオラーンムチル誕生の契機だつた。交通が不便な牧畜地域で暮らし、かつ住居が分散する牧畜民をサービスの対象にした以上、オラーンムチルの隊員は荷物を減らし、馬や馬車あるいは徒歩で、少人数で行動するため、ひとりの人間が必ず多くの役割を果たすことになつた（写真2）。こうしたことは、後に人々が「軽装備」「移動性」「コンパクト」「多能な人材」といった表現をもつてオラーンムチルをイメージすることに繋がる。オラーンムチルのイメージは、機動性に集約されていく。

隊員が牧畜民の集落に入り込んで、民族的地域的な特色ある芸能を披露したり、党や政府の政策を宣伝したり、



写真2 山道を徒歩で進むオランムチル隊員
出典：[達楞古日布・烏日嘎 2004: 14]

科学的な知識や衛生的な常識を伝えたり、また時には写真撮影、理髪、図書購入、器械修理、病氣治療などを行なったりするものが、オランムチルの四つの伝統的な仕事、つまり公演、宣伝、指導、服務となる。このいずれも、当時の内モンゴルの地理環境、生業形態、社会文化的な要請に応じたローカルなものであった(写真3)。従って、その経験が後に全国各地に普及していくことを誰も意図していなかったはずである。

2-3. 巨樹への変貌

ところが、名称は「赤い小枝」と控えめではあったものの、オランムチルは、実質的に、内モンゴル歌舞団などを超えて、文芸領域の巨樹へと成長していった。その機動性ゆえに、常に第一線で民衆のために奉仕できるという特徴が、やがて国家の指

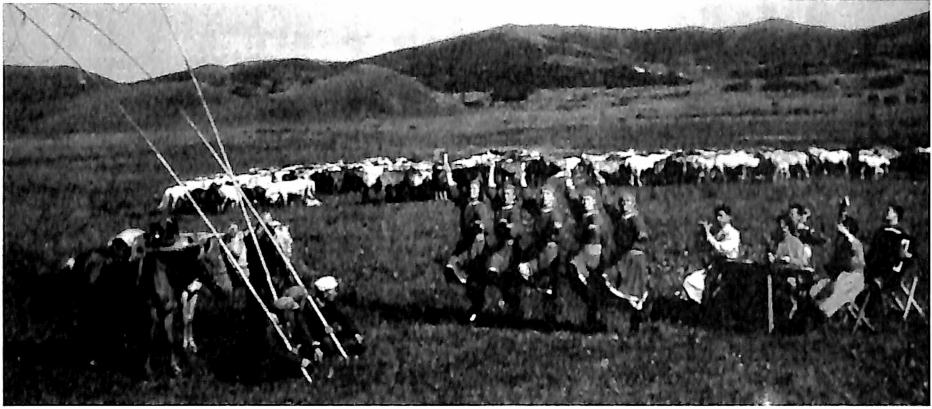


写真3 放牧している牧畜民のために踊りを披露するオラーンムチル隊員
出典：[達楞古日布・烏日嘎 2004: 17]

導層に注目され、自治区はもとより全国の芸能団体の見習うべき手本とまでなつたからである。

一九六三年十二月そして一九六四年六月において、毛沢東は文芸界批判を行ない、文芸界の諸協会や彼らが掌握する雑誌の大多数は、党の政策を基本的に実施していないとの評価を下した[「人民網 2010」]。これを機に、芸術界の刷新運動が始められ、関係省庁が新しい方策を打ち出した。文化部は全国少数民族アマチュア文芸コンクールを一九六四年十二月に開くことを決定し、内モンゴルのオラーンムチルに出演を要請した[「内蒙古自治区文化庁 1997 : 89」]。

六月に要請を受けた内モンゴルは各地のオラーンムチル・チームから人員を集めた。七月から約半年間特訓したオラーンムチル代表団一行十八人は、十二月十日はじめて北京の舞台に登場し、用意してきた「民族的、地域的な特徴に満ちた」十五のプログラムを披露した。「公演に見られる隊員たちの旺盛な革命の熱情と、実生活に基づく生き生きとした巧みな演技」に観客は圧倒された。十二月十四日、二十一日、二十二日に『人民日報』と『北京日報』においてオラーンムチルに関する紹介記事、文芸評論、団体寄稿が続々と掲載され、ここでは、「サービス精神」や「革命精神」や「戦

闘勇気」などと幾多の賛辞を受けた。さらに、コンクール参加のために上京したオラシムチルは予定の数倍以上の公演を繰り返すことになった。大晦日、人民大会堂で開かれた新年祝賀会に招聘され、周恩来など国家首脳の謁を受け、さらに年を越しても、北京、河北、天津などを中心に巡回公演をこなし、内モンゴルに帰還したのは一九六五年一月二十一日であった。その間、一月十五日付の『人民日報』は「謙虚にオラシムチルに学ぼう」との社説を発表し、文芸関係者には口先の賞賛だけではなく、自らとオラシムチルとの格差を冷静に認識し、それを縮小する方法を見出すべきだと注意を促した。一方、中共宣伝部の副部長は、「なぜ人民のために服務するか、何をもちて服務するかといった根本的な問題をオラシムチルはすでに解決した」と述べ、芸能団体としてのオラシムチルの組織理念や方法論を高く位置づけた。

コンクール終了後、あらゆる芸能団体においてオラシムチル学習キャンペーンを実施していた内モンゴルは、さらに、文化部から次の指示を受けた。「全国各省、市、自治区の文化行政部門からオラシムチル公演の要請を受けている。全国の文芸関係者にオラシムチルの革命的な精神と気概を経験するチャンスを与えるため、さらに〔コンクールに参加した既成の代表団以外に〕オラシムチル代表団を二つ編成し、全国各地に赴き巡回公演を行なうことを要請する」〔内蒙古自治区文化庁1997: 89-92〕。

一九五七年に生まれたオラシムチルのチーム総数は、コンクール開催の一九六四年末時点で三十三に達し、一九六五年四月には三十八となった。そのうちの十九チームから文化部が選んだ四十人あまりの隊員で構成された三つの全国巡回公演チームは、一九六五年五月三十一日北京に集合し、宣伝部から巡回の目的と任務に関する説明を受けた。共産党と民族団結を賛美し、内モンゴルの社会主義建設と革命精神を紹介する歌や踊りなどのプログラムを、三チームはそれぞれ四十から五十くらい用意して、北京から長い巡回公演の旅に出た。⁽⁵⁾ オラシムチルの機動性が存分に活かされたこの巡回公演は、延べ時間七カ月半、移動距離五万キロ、出演回数六〇〇回、

動員観客数が一〇〇万という記録を残した(図1)。台湾、香港、マカオ以外の中国の各地域の党や行政府の長と会見、各芸能団体と交流し、その活動が『人民日報』、『光明日報』、『新華社などマスメディアに頻繁に報道された。全国的なオランムチル学習ブームが引き起こされた。巡回公演期間中、内モンゴルにおけるオランムチルの数は四十七までに増加し、中には漢族中心の農耕地区のチームも現れた。一九七〇年までに六十三チームにまで増え、その多くが農耕地区のチームだった[内蒙古自治区文化庁 1997: 95-119]。

他方、自治区外部に分布し、かつ民族自治権を持つモンゴル地域、例えば、東北三省、西北の青海省、新疆ウイグル自治区や甘肅省の各モンゴル族自治地域においては、「オランムチル」と称する芸能団体が続々と設立された。内モンゴルもこうした自治区外モンゴル地域のオランムチルに直接的な職業指導、場合によっては資金や人的な援助などを行なっていた。この点からはオランムチル現象の民族的な側面を窺い知ることができよう。甘肅省北西部に位置する肅北モンゴル族自治県の経験が、その好例である。

肅北モンゴル族自治県オランムチルの元リーダーJM氏(男性、六十代)の話によれば、馬頭琴はもともと肅北には無かったが、その出現は、オランムチルの導入と深く関連するという。⁽⁶⁾一九七四年JM氏らは、十人の牧畜民の若者を集め、当時の全国模範オランムチルとされる内モンゴル自治区オトク旗オランムチルに赴き、歌、踊り、音楽、声楽などの基礎訓練を受け、年末に自治県のオランムチルを設立した。⁽⁷⁾

また、JM氏は、オランムチル導入前後にみられた地域社会の変化について、民謡と踊りとの関連で次のように述べた。「オランムチルが誕生するまで肅北地方の民謡はたくさんあった。ただ、内モンゴルのそれとは全く違っていた」。言い換えれば、オランムチルの登場によって内モンゴルの歌(従って一般に知られる「モンゴル族の歌」)が多くあらわれたという意味である。また、現在、自治県で流行っている民族舞踊も、いずれも内モンゴルから導入したもので、もともと我々にはモンゴル踊りというものはなかったという。⁽⁸⁾さらに、馬頭琴もオ

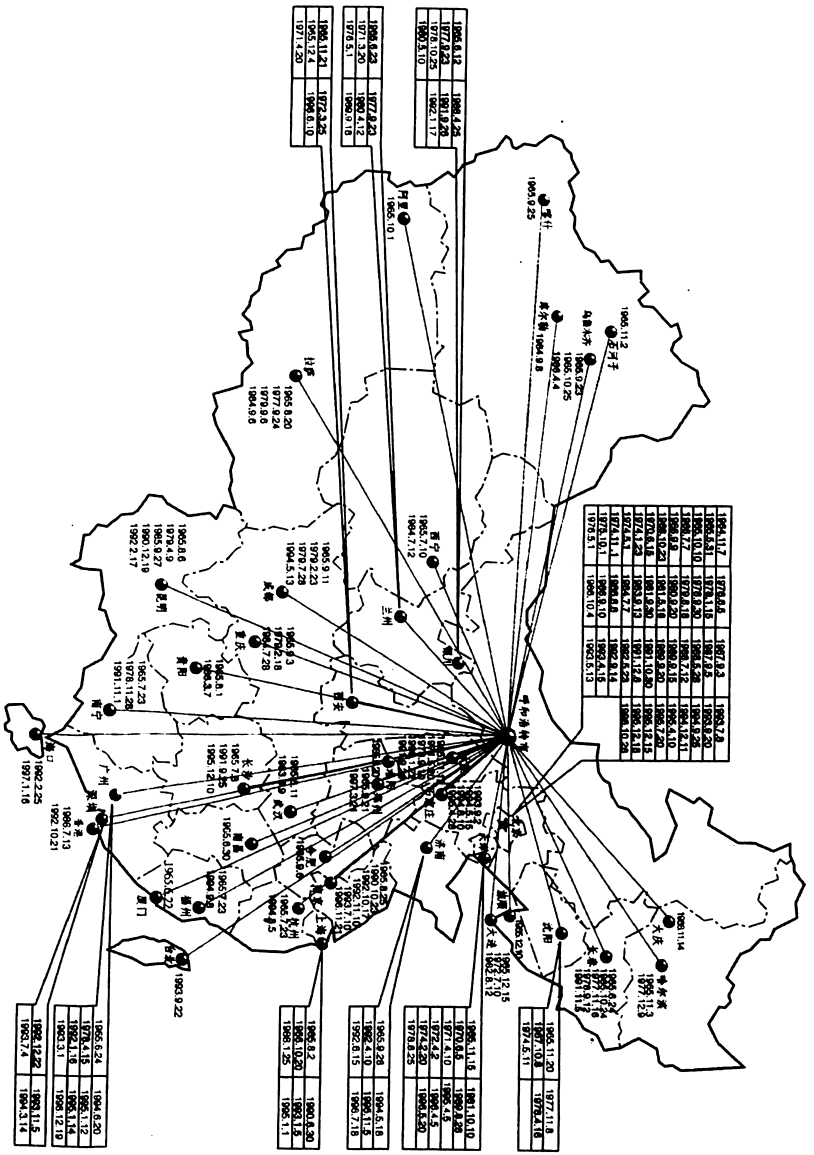


図1 中国国内における内モンゴル自治区オラームナルの巡回公演図
 出典：〔内モンゴル自治区文化庁 1997〕



写真4 牧畜地域で活躍する肅北モンゴル族自治州オランムチル
出典：[張 2007]

ラーンムチルに所属するある内モンゴル出身者によって導入したとされる。⁽⁹⁾ 地域的なコンテクストで言えば、オランムチルは彼らの文化的な破損の修復装置となる。すなわち、オランムチルはモンゴル文化のシンボルとされる馬頭琴（歌や踊りも）、そして内モンゴル式なモンゴル服などを地域に仲介し、内モンゴルを基準とするモンゴル族としてのあり方を、自治区以外の地域に導入したということになる（写真4）。

3. 解釈されゆく巨樹

3-1. 普通名詞としてのオランムチル

オランムチルへの注目度は高まり、一九七〇年代には最高潮に達した。烏蘭牧騎Ⅱ社会主義文芸輕騎兵というこの表現を定着させたのは、前節で言及した『人民日報』など権威的マスメディアの報道であったと考えられる。無論その背後には国家首脳たちの支持もあった。一九六四年の全国巡回を実現させた直接のきっかけは周恩来首相の「永遠不滅なオランムチル」、「オランムチルという火を全国に燃え広が



写真5 江沢民と内モンゴル自治区直属オランムチルとの三回目の会見(1999)

出典：[達楞古日布・烏日嘎 2004: 11]

せよう」というコメントであり、それを受けて、文化部が全国巡回を発案したとされる。そのみならず、オランムチルの隊員たちと毛沢東が五回、周恩来が十二回見を行なったり、ともに食事をしたりしていた事実からも、中国の第一世代指導者たちがオランムチルを重要視していたことが窺える。後の第二、第三世代の指導者もオランムチル重視の路線を堅持していた。例えば、一九八三年に、鄧小平は「オランムチルの作風を発揚し、全身全霊人民のために奉仕する」との揮毫を、一九九七年に、江沢民は「オランムチルは社会主義の文芸領域における旗印」との揮毫を贈った。そのようにして、オランムチルはひとつの古典になり、中国少数民族の文芸を代表するようになる(写真5)。

こうしたマスメディアや政治家の影響もあり、自治区の外部へ進出していくにつれ、オランムチルが本来持つ小枝という控えめのニュアンスは徐々に失われていく。その代わりに、オランムチルには「軽騎兵」など強力で、先鋭的なイメージが付与されていく。オランムチルはこうしたインパクトで、さらに多くの人を引き寄せ

た。前節で言及したようにモンゴル族だけでなく、農耕地域の漢族なども、自らの芸能団体名をオラーンムチルに改名したり、新たにオラーンムチルを設立したりしていた。自治区内に限らず、全国各地に「オラーンムチル式○○」と称する芸能団体が現れた。一九八三年九月十八日、北京において「全国オラーンムチル式演出隊文芸祭」が開かれ、十六の省が参加した。一九八八年には五つの少数民族自治区だけでオラーンムチル式演出隊の数はすでに二二六に達していた。一九九七年北京で開かれた、「全国オラーンムチル先進団体表彰式」において、内モンゴルの五チーム、ほかの地域からの十チームが表彰された。さらに、一九八三年上記全国オラーンムチル式演出隊文芸祭に参加した肅南ヨゴル族自治県の文工隊は、全国オラーンムチル式先進単位と表彰された。その後、肅南ヨゴル族自治県文工隊の主力メンバーを中心に、甘肅省オラーンムチル・チームが設立された〔甘肅省肅南裕固族自治県地方誌編纂委員会 1994: 345〕。

このように、オラーンムチルはもはや説明されるべき固有名詞ではなくなり、一般的で誰もが知っているという前提で、普通名詞として使用され始めたことが分かる。少数民族文芸の特徴を意味する普通名詞として用いられる傾向は、上記文芸祭以外に、新聞報道においても見られた。例えば、広西チヨン族自治区のあるチヨン族劇団の活躍ぶりを「チヨン族のオラーンムチル」とするもの〔鄧平・劉延智 2004〕や、青海省玉樹チベット族自治州の歌舞団を「チベット歌と踊りの里のオラーンムチル」と称するもの〔玉樹藏族自治州歌舞団 1997: 33〕、あるいは近くに駐屯する軍隊のために歌や演奏を披露するなど芸術的な才能を持ちかつサービスピ精神旺盛な内モンゴルのあるモンゴル人家族を「家庭オラーンムチル」と表すもの〔張華勝・張源 2004: 33〕など数多くある。

そして、少数民族に限らず、漢族地域での事象を表現する際もオラーンムチルが普通名詞として用いられる。例えば、一九六〇年代、臨機応変に教員職業訓練を行なった安徽省のある県の経験が「オラーンムチル式職業訓練」と表現されたり〔界首県文教局教研室 1963〕、多様な文芸形式で科学知識の普及を試みた福建省の経験が「オ

ラーンムチル式科普方法」と賞賛されたりしていた〔福建省科協調査組1966〕。一九九九年、上海の浦東地区に浦東女子発展学校という学校が誕生したときに、地域の指導者はそれを「オラーンムチル式女子学校」だと高く評価した〔盛平・陸天一1999〕。また、河南省登封市において地域の古い建築を世界遺産に登録させるため、観光客に地域文化を積極的に宣伝するボランティア団体の献身的な仕事振りが、「嵩山のオラーンムチル」とたとえられる〔李曉光2008〕。そして、中国の曲芸家協会（演芸家協会）が自ら民衆の中に入り込み、レベルの高い芸能を身近に楽しんでもらったことが、「毎回十人余り、オラーンムチル式の少人数編成で、劇場に行くことのない辺境貧困の人々のところに芸術を届けた」〔李韻2005〕とする。さらに、浙江省沿海地域において、離島の住人に公演を楽しんでもらったアマチュア演芸グループのことを「海上オラーンムチル」と表現する〔崆崆泗県文化館2002〕。すべてにおいて「オラーンムチル」が誰もが理解できる語彙として使われている。そのいづれも、機動性に共通点を持つ。

3-2. 制度としてのオラーンムチル

自治区内の農耕地域でのチーム増加、自治区外での名称の普及など華々しい側面がある一方、その「発祥地」であった内モンゴル牧畜地域でのオラーンムチルの状況は必ずしも明るくはなかった。とりわけ文化大革命期においてオラーンムチルは「オラーンフ陰謀集団」の手先と批判される。一部の地域では「毛沢東思想宣伝隊」や「文工団」に改名されたり、とりわけ内モンゴル自治区から隣省に分割されたジョーオダ盟やジリム盟などの地域では活動を完全に停止させられたりして〔内蒙古自治区文化庁1997:118-119〕、全体として牧畜地域のオラーンムチルは減少する方向にあった。この状況は、文化大革命の終結とともに緩和され、牧畜地域でのオラーンム

チルも回復された。

オラーンムチルに関する自治区レベルでの法的な規定は、一九五七年成立時の「オラーンムチル事業条例（草案）」と一九八五年の「内モンゴル自治区オラーンムチル事業条例」である〔内モンゴル自治区文化庁1987〕。前者は「草案」であつたものの、その間一切修正がなかつたことを考えれば、オラーンムチルの位置づけに関する公的解釈とみなせる。両者を比較すると、二十八年の時を経て、オラーンムチルの位置づけに変化が見られることが分かる。

新条例は第一章で性質、第二章で方針と任務を規定する。性質に関しては「オラーンムチルは党の文芸方針と民族政策の指導の下で、内モンゴルの実情に合わせて設立した総合的な文化チームであり、公演を中心とする文化事業組織である。主に社会主義文化芸術の普及に従事する」とあり、方針については「オラーンムチルは党の四つの基本原則、人民のために奉仕するという原則を堅持し、……文化芸術の革命化、民族化、大衆化を実現するために努力する」とある〔内モンゴル自治区文化庁1985: 294〕。

この新条例によれば、オラーンムチルは社会主義文芸の普及を主たる目的とする組織であるという。一九五七年条例の第一条の第一段落で強調されていた「民族的」な活動方式、「民族文化」の伝達といった文言はなくなり、「社会主義」を強調した第二段落の内容がより洗練された表現で残ることになった。二つの条例内容の微妙な変化は、これまで述べてきた、中国全体におけるオラーンムチルの地位変化とほぼ軌を一にしている。一九八五年に自治区人民政府の審議を通過した新条例は、少数民族文化芸能問題に関する中国全国で初めての法規的な文書であつた。それによって、オラーンムチルは制度的に保障され、制度の枠組みのなかで次の道を歩んでいくことになる。

オラーンムチル誕生三十周年と重ねて、一九八七年六月二十六日に、オラーンムチル事業を指導してきた内モンゴル文化庁の主導の下、「内モンゴルオラーンムチル学会」という民間学術団体が設立された。オラーンムチ

ル事業を活性化する趣旨で誕生したこの学会は、オラインムチルに関する理論的実践的な學術活動の組織、オラインムチルの活動内容の宣伝普及、学会誌の編集発行、自治区外のオラインムチル式芸能団体との學術交流の促進、オラインムチル事業に対する社会全体の理解と支持を動員することなどを任務とする。会員は、オラインムチルの仕事に五年以上従事した経験のある者、オラインムチル事業を理解し支持する一般人、学者、公務員などによって構成されている「内蒙古自治区烏蘭牧騎学会〔1990〕」。一九九〇年代末に、その会員は二〇〇人に達した「任彦賓〔1997〕」。趣旨、任務、組織主体や会員の構成から分かるように、当学会はオラインムチルを対象として純粹に研究を行なうためというよりは、オラインムチル事業を維持、推進させるための実践団体であるといえよう。

また、一九九八年、「内モンゴル自治区オラインムチル暫定評価方法」が制定された。対象はオラインムチル自身と所在する地方自治体で、二年に一回評価が行なわれる。公演、指導、宣伝、服務といった四つの伝統的な仕事に費やした時間、リハール室の面積、資金の獲得状況などによって、オラインムチルは三つのランクに分けられる。例えば、四ヶ月地方を訪問し、公演回数が一〇〇回で、リハール室の面積が一七〇平方メートルといった基準を満たすことができれば、そのオラインムチルは一〇〇点になる。他方、メンバー更新を行なったか、専門会議を開いたか、資金を提供したかで、その地方自治体のオラインムチル重視度が測られ点数がつく。両者をあわせて総合的に評価される⁽¹⁾。

3-3. 商品としてのオラインムチル

上記四つの伝統的な仕事を徹底するためにオラインムチルは、設立以来、「四つの問わない」方針を掲げ続けた。公演先の生活条件の良し悪しを問わない、観客人数を問わない、公演場所を問わない、移動の距離を問わな

い、である。こうした環境のなかでオランムチルの隊員たち自らも、さまざまな作品を創作していた。例えば、「美しい草原我が家」や「毛主席―草原人民の愛」などの歌のメロディは、多くの内モンゴル人に親しまれていた。同時にオランムチルも民族文化の継承に努め、例えばフレー旗のオランムチルは「アンダイ」⁽¹²⁾という伝説を生かし、「アンダイ伝記」、バリーン右旗も地域の民間伝説に基づき「シヤグダル」⁽¹³⁾といったモンゴル劇を創作し、牧畜民に親しまれてきた【布赫 1998】。

この「四つの問わない」方針は、基本的に公演の対象地域を牧畜地域に、観客を牧畜民に設定したことと必然的な帰結である。こうした方針の下で、オランムチルは無償でユニークな活動を展開してきた。ただしそれを可能にしたのは、計画経済であった。計画経済時代、オランムチル隊員の給料や機材などに関わる経費は全て地方自治体の財政から賄われていた。しかし市場経済の時代に入ってから、多くの地方自治体が財政難の問題を抱え、オランムチルはむしろ重荷となり、解散するところも出た。一九九七年の内モンゴルオランムチルの数は「牧畜地域に限られた」四十六チームだけであった。その後、「優秀な人材は沿岸地域に流出」するなど、自治区の隊員総数も減り続け、一九九七年の二〇〇〇人から二〇〇三年には一四〇〇人になった【郭鈺 1997: 51; 童古麗珂 2001】。

そこで、市場経済の時代におかれるオランムチルは、「文化市場に対する分析能力を強化し、文化商品経済に内在する要求に応えられるように努力し、人々が必要とする文化商品を生産すべき」との提案が内モンゴルの芸術研究分野においてなされている。ここで言う市場は観客であるが、多くのオランムチルが内モンゴルを本拠地とするのに対し、観客数は内地のほうがはるかに多い。利益と効率に直結する内地市場を開拓すべきと分析である。同時に、市場のニーズに対応するため、オランムチルは「民族の文化ブランド」も堅持していくべきことも提言される【衛平 2005】。多くのオランムチルは生き残るために、自治区そして国内外で有償公演を行



写真6 インドネシアにおけるオーシン旗オラームチルの公演 出典：[鄂爾多斯文化2009：40]

なうようになっていた。前節の評価基準に従って地方訪問や専門強化訓練を遂行することさえできれば、それ以外の期間には国内外で営利活動を行なうことも可能となる(写真6)。

有償公演だけではなく、特定の機関や企業と連携し、二つの看板を立てる現象も現れた。つまり、元来の「○○地域のオラームチル」の看板を掲げると同時に、運営資金を提供してもらった相手側の名を用いて「××機関・企業のオラームチル」という看板を立てて活動するという現象である。例えば、内モンゴル自治区直轄オラームチルは、「水利部

オラームチル芸術団」という看板も掲げ、全国各地の水利関係の工事現場を巡回し、労働者の娯楽生活を充実させる代わりに、水利部から資金を提供してもらい、運営経費に充てている。ほかのオラームチルもその地域内外の大手企業と連携するようになっていた(写真7)。「内蒙古自治区文化庁1997：229-232; 内蒙古自治区直屬烏蘭牧騎1997」。

これに加えて、企業によって新たに作られたオラームチルも登場するようになった。「牛氏酒業有限公司」(元「蒙牛酒業有限公司」という牛乳酒の製造企業が二〇〇二年十一月に設立したオラームチルがそれである。当企業は、「オラームチル的な文化販売方式」を採用したことによって急成長した。その方式とは、顧客に、「モンゴル文化に固有の熱烈な、愉快な、和やかな雰囲気」を感受してもらうために、モンゴル服を着用した男女歌手

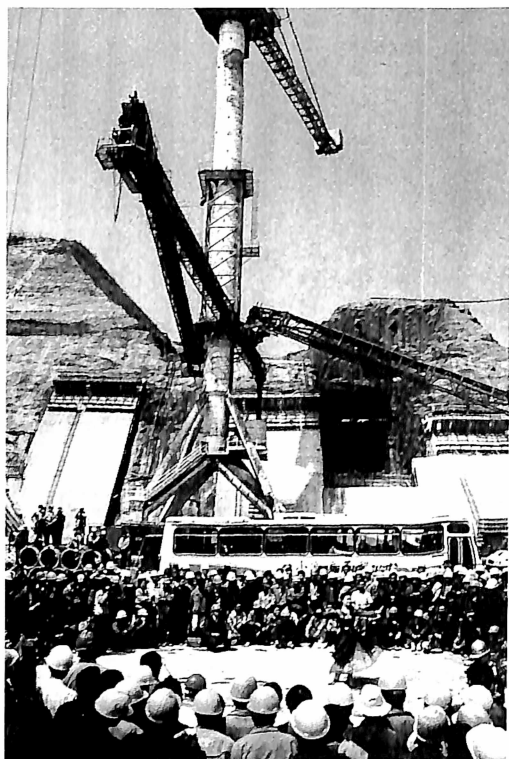


写真7 水利施設の建設現場で公演するオラーンムチル
隊員 出典：[達楞古日布ほか 2004: 18]

が、牛乳酒をいっぱい入れた銀の碗と白いハダク(14)を手にとって、馬頭琴の伴奏にあわせ、優雅な歌で顧客を誘い、牛乳酒とハダクを捧げる……というものであった。企業側は、牛乳酒を売るといことは、草原文化のイメージを客にアピールすることに他ならないという認識を持っていた。そのため、とくに内モンゴル以外の地域で商品販売するにあたり、モンゴル族の歌手と馬頭琴の演奏者によって、「オラーンムチル末端文化販売促進班」が組織された。そうしたところ、顧客が後を絶たず、注文電話やファクスもいつも鳴りっぱなしであるという「高英・蕭蕭 2004」。牛迎俊社長の説明によると、「モンゴルは歌も踊りも得意な民族である。モンゴル民族文化の真髄であるから、歌舞はわれわれの牛乳酒の文化的内包をもっとも精確に表すものとなる」という[辺長勇 2004]。オラーンムチルは、また、内モンゴル自治区の観光サービスなど第三産業を成長させる新たな起爆剤として自

治区政府によって位置づけられるようになっている。そこでもやはり注目されているのは、オラーンムチルが体現しているとされるモンゴル文化である。たとえば、二〇〇三年のオラーンムチル学会において自治区副書記長の陳光林は、「内モンゴルはオラーンムチルを著名な文化ブランドに育てていくべし」というテーマで行なった講話で、『オラーンムチル』の潜在

的なブランド価値を掘り出し、それを内モンゴル文化の代表的な銘柄に育ていかなければならない」と強調した
〔郭鈺 2003〕。

市場経済時代に入ってから、企業オラオンムチルが新たに誕生している一方で、既存のオラオンムチル隊員たちは、終身雇用の対象から外され、三年ごとに契約更新しなければいけないという待遇の変化を経験することになった。チーム全体としても、自らの運営資金を獲得するために、営利活動を行ない、企業などと連携を結ぶことが必要となってきた。そのため、堅持しなければならぬ「四つの問わない」を特徴としてきたオラオンムチル本来の仕事内容が、容易に維持されているとは考えにくい。

しかし、こうした内容の変化があつたとしても、オラオンムチルという名称を維持していることは確かなようである。オラオンムチルに資金提供して文芸サービスを求める企業側が、そこに市場価値を見出したからであろう。言い換えれば、企業にとつてオラオンムチルは直接あるいは間接的に価値を生み出す「資源」となっており、付加価値をもたらす「商品」ともなっている。市場における両者の協力を可能にしたものは、消費者たちがつオラオンムチルのイメージであり、草原、純朴といった「モンゴルの要素」に対する消費者たちのニーズである。それらの要素を繋げていけるものは、オラオンムチルという名称、そしてその名称の下で活動する企業などである。このイメージとニーズをいかに営利的に活用してきたかを明示したが、上記の事例である。

4. おわりに

オラオンムチルは、内モンゴルの指導者たちがその地域的な特殊状況を考慮して作ったアマチュア芸能団体である。設立当初、その位置づけは控えめだった。交通が不便な牧畜地域のモンゴル族牧民たちの単調な生活に

娯楽を提供するというのが目的だった。牧畜民の集落に赴き、モンゴル語話者である彼らに親しみやすい表現を用いるのが方法だった。活動内容には、「解放」以降、内モンゴルに来た内地の芸術家たちによって創作された「モンゴル族舞踊」とされるものもあれば、各地域で伝わっていた踊りや歌をバージョンアップさせ「モンゴル族を代表する芸術」と言われるものも含まれていた。それゆえに、いわゆるプロフェッショナルな芸能団体である文工隊や歌舞団と異なり、日常生活に溶け込んだオラーンムチルは、牧畜民から「マナイ（我々の）オラーンムチル」と親しく呼ばれ、さらに、自治区外のモンゴル族地域へそのまま移転された。ここでは、モンゴル族的なものとして展開し、内モンゴルを基準とした中国モンゴル族的な共通項の確立に寄与する。このコンテキストにおいてオラーンムチルが果たした役目は、巨樹なみのものだった。

他方、当時中国全体の社会経済的な状況において、機動性に着目されたオラーンムチルの存在は、全国で注目の的となり、文芸領域の模範として位置づけられた。そうした状況下で、オラーンムチルは民族文化の担い手から社会主義文芸リアリズムの担い手として位置づけられ、地域的、民族的なもの、すなわち固有名詞から普通名詞へと変わっていった。この変遷は、条例の修正からもうかがえる。そして、時代の変化に伴い、オラーンムチルの活動方式やそれをめぐる外部の解釈も変化する。政治第一の時代では、政治家らはオラーンムチルを「社会主義文芸軽騎兵」として解釈した。それはモンゴル族が遊牧民族で、その民は生来「機動性に富んでいる」とのイメージから派生したものだだろう。経済第一の時代では、企業家などはオラーンムチルを「文化ブランド」として活用するようになった。これは、消費者が抱く「自然」「無邪気」といったモンゴルのイメージをオラーンムチルが体現することでビジネスを有利に展開できるとの見込みによるものである。

冒頭に述べたように、多くの人にとって内モンゴルは、中国少数民族のエキゾチシズムの象徴となっている。だがその内実（人口比例、生業形態、風俗慣習など）は、人々が想像するほどエキゾチックなものではない。内モン

ゴルは、その名称によつてしか外部にエキゾチックなイメージを与えられず、抽象名詞となり独り独り歩きつつある。これは、オランムチルの普通名詞化と併走している。内モンゴルとオランムチルの両者を見る外部者には、モンゴルというカテゴリーをめぐるイマジネーションが、共通に働いている。モンゴルというカテゴリーは、本論のコンテキストでいえば、移動性、自然、無邪気さなど、いくつかの要素によつて支えられている。オランムチル、従つて内モンゴルという名称が存在するが故に、常にモンゴルへの関心やニーズが生み出されるのである。オランムチルという名称の誕生や外部進出の経緯を通じて検討したように、そのイメージ効果（インパクト）は、内実ではなく形式によるものである。オランムチルという形式それ自体は、時代に応じてその機能を変化させながら、一定の条件のもとで、人が欲するモンゴロイイメージの供給源となり続けてきた。つまり、オランムチルは、多様な内容を受け入れることが可能な「容器」として、モンゴルという枠組みを存続させている。その容器に盛られる具体的なモンゴロイイメージは、政治・経済・社会状況に依存し、可変的である。

オランムチルは、漢語では社会主義文芸軽騎兵であると解釈されてきたが、この解釈からは、「社会主義文芸リアリズム」に通底しているように思われるかもしれない。「形式においては民族的、内容においては社会主義的」というスターリンの表現から分かるように、社会主義イデオロギーの「内容」が第一義であり、「内容」のいかんによつて「形式」に連動する人間の内実が方向付けられると認識されている。また、政治イデオロギーを推進するのは往々にして民族的マジョリティであるから、そのイデオロギーの実質は民族同化の道具だと認識することも可能であろう。社会主義国家、特にその周辺民族地域での文芸をめぐる研究の多くも、こうした認識に依拠し、文化「内容」の変化に執着してきた。

無論、「形式」と「内容」は相互依存する。さまざまな既存のもの（内容）から抽出された表現がその「形式」となる場合がある。他方、何らかのニーズによつて最初から人為的に作り出された名称が「形式」となることも

ある。こうした名称あるいは形式は、いったん作り出されると、諸社会要素を動員し、「内容」を新たに生みだしていくのである。オラールンムチル現象は、このことを物語る。計画経済の時代には牧畜民の娯楽生活を活性化するためのアマチュア文芸チームから社会主義文化を伝播する軽騎兵へと、すなわち固有名詞から普通名詞へと変化を遂げ、そして市場経済時代には文化ブランドあるいは商品などへと変身し、さらに受容地域によつては民族的紐帯ともなるなど、オラールンムチルが芸能団体として公演してきた内容やそれに対する解釈は、時とともに変化し、流動的であつた。だが、流動的な内容や解釈からその性質はみえない。

他方、全体として、オラールンムチルという名称と形式は保たれてきた。これはオラールンムチルを必要とする地方自治体、国家や企業、個人などが、一貫してその名称に共通の価値を認めてきたからである。それはモンゴルというカテゴリーにまつわる人間の拘りだつた。「社会主義文芸軽騎兵」という位置づけとモンゴル族の「機動性」、「文化ブランド」のニーズとモンゴル族の「無邪気さ」との関連付けは、まさにモンゴル族がもつべき属性に対するイメージネーションの表れである。オラールンムチルに関する解釈こそ変化したが、オラールンムチルという名称は不変であつた。その解釈の根拠は、それがモンゴルというカテゴリーの上に置かれていることにある。このイメージネーションが持続する限り、オラールンムチルの名称と形式は安定性を保つ¹⁵⁾。

このコンテキストでいえば、オラールンムチルは、実践の形式そして組織として、さまざまな解釈や意味づけを許容する存在であり、それが最も極端な形で現れたのが、その普通名詞化においてであつた。ただし、この実践の形式そして組織に、いくつかの時代を越えて連続性を与えているのは、同一の名称が用いられ続けている事実と、その名称がモンゴル語であることによるモンゴルカテゴリーとの関連である。内実を欠いた「モンゴル」カテゴリーを実体化しているのが、「内モンゴル」である。内モンゴルで誕生したオラールンムチルは、モンゴルカテゴリーに内実を与え、実体化する機能の一翼を担い、異なる社会状況をモンゴルカテゴリーの内実に反映させ

る媒介ともなっている。

モンゴルカテゴリーはオラーンムチルによって意味づけられ、オラーンムチルはモンゴルカテゴリーの参照によって同一性を保つ。この相互参照性が、実体化、連続性の効果をもたらす。従って、オラーンムチル現象——モンゴル語の名称をめぐる人間の諸行為現象——に着目することで明らかになったのは次の点である。すなわち、内モンゴル・インパクトとは、民族カテゴリーの交渉を前提に、諸人間集団の相互作用の中で生じた一連の政治的社会的な現象なのである。

【注】

- (1) 「」中の「」は、筆者による補足。以下同様。
- (2) 一九二九年から一九三二年まで三回来日し、江口隆哉や宮操子の下でモダンダンスを学んだ経験のある、二十世紀中国現代舞踊の開拓者である。一九〇六—一九九五。
- (3) モンゴル人民共和国におけるオラーンボロン (ulaGanbulang) は、民衆に親しい方法で、革命の歌やマルクス、レーニンの語録、党の方針を宣伝するため首都から派遣された文芸チームによって、一九二四年、地方の中心地や寺院など定住地域で作られた施設の名である [Pegg 2001: 253]。その前身は、普通のモンゴルゲルと差異化をはかり、公共の場を意味する「オラーン (赤い) ゲル」だった。後に、木造の固定建築物になり、その直角の外形に因んで「オラーンボロン」と呼ばれるようになったとされる [Marsh 2009: 48-49]。また、その社会的機能および当時モンゴルとソ連との関係を考え合わせれば、オラーンボロンと、「革命以前のロシア正教会の聖像アイコンを祀るための red corner (Krasnyi ngol) に取って代わった、レーニンコーナー」 [Buchii 1999: 49] といった無神論的社会主義の秩序を意味するモノとの親縁性も見出せるかもしれない。
- (4) 文化部とオラーンムチルの架け橋になったのは、当年三月に内モンゴルに来て、「オラーンムチルの生活を一ヶ月く

らい体験視察した文化部民族文化司の二人の女性官吏」だった。上京後、自らの体験に基づき二人はオラーンムチルのあり方を報告した。この報告は、「文化部が直接オラーンムチル事業に注目する重要なきっかけを作った」のである〔内蒙古自治区文化庁 1997: 89〕。

(5) 第一チームは六月十三日から十二月十日にかけて福建、江西、浙江、上海、江蘇、安徽、山東、山西、陝西の九省と市での、第二チームは六月十一日から十二月十六日にかけて湖北、広東、湖南、広西、雲南、貴州、四川、河南、吉林、黒龍江、遼寧の十一省と自治区での、第三チームは六月十三日から十二月十日にかけて寧夏、甘肅、青海、チベット、新疆の五省と自治区でのすべての公演と交流任務を果たしたという。

(6) 歴史的にチベットの影響を強く受け、文化的に「チベット化」しつつあり、また近代においてカザフ族の侵攻を受け、地域社会が物理的に破壊された経験をもつシルクロードに位置する肅北モンゴル族自治州の人たちにとって、民族文化の再建が不可欠となっていた。一九五六年に設立した自治県は「一九六六年五月からアマチュアの芸能人材を集め、自治県オラーンムチルを結成しよう」と計画していたが、文化大革命が始まったため挫折した。「一九七四年に再度試みはじめた」という〔李玉寧 1989: 428〕。

(7) 創設を支援するため、オトク旗オラーンムチルは、隊員五人を肅北モンゴル族自治州に派遣し、自治県オラーンムチルに編入させた〔内蒙古自治区文化庁（編） 1997: 126〕。

(8) 歌と踊りに関するJ M氏の説明は、冒頭に紹介した「モンゴル族は歌の民族というべきだろう。しかし、踊りに関しては必ずしもそれではなかった」という買作光の見解を内モンゴル以外のモンゴル族地域のコンテクストからも裏付けるものとなる。

(9) 「肅北のモンゴル族同胞のなかで馬頭琴に関する知識は殆どなく、馬頭琴の音をほとんど耳さえしたことのない人もいた」ことに驚いたエルデニ氏が、自治県の政府のバックアップのもとで、「無料で馬頭琴の演奏を披露したり、レッスンを開いたりして、馬頭琴の知識を徐々に普及し始めていた……」〔付勇 2005〕。

(10) 自治区政府のリーダーであるオランフが、内モンゴルの独立、内外モンゴルの統一を企む分裂主義者として攻撃されて、党や政府そして軍の職務をすべて剥奪された際に用いられた名である。漢語では「烏蘭夫反党判国集団」ともいう。

(11) さらに、二〇〇〇年、内モンゴルの首都フフホト市で「オランムチル訓練センター」が設立された。自治区各地域のオランムチルを対象に、踊り、馬頭琴、ホーミなど専門知識の強化に加えて、チームリーダーなど管理職の間を対象に組織管理などの基礎教育を行なう。講師は受講生のニーズに合わせて臨時に招聘される。資金は、自治区文化庁、対象オランムチル、受講生個人がそれぞれ負担する金額で賄われる。二〇〇五年現在、すでに一回行なわれ、六十人あまりが修了したとされる。

(12) シャーマニズム的な踊りであり、踊ることのできる心臓の病を治すことができるとされる。二〇〇六年、中国の無形文化財に登録される。

(13) 民間詩人（一八六九—一九二九）。七歳から三十五歳までは僧侶であったが、宗教界における腐敗などを風刺したため破門され、草原各地を流浪しながら、数多くの作品を後世に残した。

(14) 謝意や敬意を込めて相手に贈られる絹織物の名である。白、青、黄色が一般的である。

(15) 中国の漢英辞書でオランムチルは、*"a Nei Monggol revolutionary cultural troupe mounted on horseback"*と、内モンゴル (Nei Monggol) との関連で訳される [卓光華 1999]。

【参考文献】

〈英語 (アルファベット順)〉

Buchi, Victor 1999 *An Archaeology of Socialism*. Oxford: Berg.

Marsh, Peter K. 2009 *The Horse-head Fiddle and The Cosmopolitan Reimagination of Tradition in Mongolia*. New York: Routledge.

Pegg, Carole 2001 *Mongolian Music, Dance, and Oral Narrative: Performing Diverse Identities*. Seattle, WA : University of Washington Press.

〈中国語(ピンイン、アルファベット順)〉

辺長勇 二〇〇四「蒙牛酒業耐心等待奶酒業的春天」『当代經理人』第九期：六十一—六十一。

布赫 一九九八「民族芸術の常青樹——内蒙古烏蘭牧騎四〇年有感」『光明日報』二月一日。

嶼泗県文化館 二〇〇二「嶼泗県文化館」『浙江文化信息网』(インターネット、二〇〇二年七月一日、<http://www.zjcnt.com/Article/2006-03-22/26381.shtml>)。

達楞古日布・烏日嘎 二〇〇四「歌醉千里 游芸天涯——記烏蘭牧騎半个世紀的征程」『内蒙古画報』第〇四期：十一—二十一。
鄧平・劉廷智 二〇〇四「活躍在壯鄉的『烏蘭牧騎』」『中國民族報』四月三〇日。

鄂爾多斯文化 二〇〇九「烏審旗烏蘭牧騎出訪斯里蘭卡、印度尼西亞」『鄂爾多斯文化』第三期：四十。

福建省科協調查組 一九六六「南通公社的業余科普文藝活動」『新疆農業科學』六期：二四六—二四九。
付勇 二〇〇五「馬頭琴文化傳播者額爾德尼」『内蒙古新聞網』(インターネット、二〇〇五年四月十五日、http://news.nmnews.com.cn/c/article/20050415/49655_1.html)。

甘肅省肅南裕固族自治縣地方誌編纂委員會 一九九四「肅南裕固族自治縣誌」蘭州：甘肅民族出版社。

高英・蕭蕭 二〇〇四「我从草原来——記奶酒文化的傳承者牛迎駿」『時代潮』二・三：八十二—八十五頁。

郭鈺 一九九七「乘時代長風 舞万里霓虹——烏蘭牧騎四〇周年發展記實」『内蒙古芸術』乙二期：五十一—五十九頁。

二〇〇三「内蒙古：要把烏蘭牧騎打造成著名文化品牌」『内蒙古新聞網』(インターネット、二〇〇三年十二月十七日、http://www.nmnews.com.cn/news/article/20031217/20031217018208_1.html)。『内蒙古日報』より転載。

李韵 二〇〇五「曲芸烏蘭牧騎在行動」『光明日報』(インターネット、二〇〇五年五月二一日、<http://www.gmw.cn/01gmtr>)。

- 李晚光 二〇〇八「甘為申遺『跑龍套』、登封30名老藝人演繹——高山『烏蘭牧騎』」《鄭州日報》三月二十五日。
- 李玉寧（主編）一九八九『爾北蒙古自治區』酒泉·爾北蒙古自治區人民政府。
- 美麗其格 一九九二a「內蒙古文工團的沿革」《吉林藝術學院學報》一二期：八五—八九。
- 一九九二b「內蒙古文工團的沿革（統）」《吉林藝術學院學報》三期：五十一—五十四。
- 『內蒙古藝術』二〇〇三「內蒙古民族歌舞劇院簡介」《內蒙古藝術》二期：九。
- 內蒙古自治區文化局 一九五七『烏蘭牧騎工作條例（暫定）』內蒙古自治區文化庁編、一九九七『烏蘭牧騎之路——紀念烏蘭牧騎建立四〇周年 一九五七—一九九七』二三五—二六六頁、呼和浩特：內蒙古人民出版社。
- 內蒙古自治區文化庁 一九八五「內蒙古自治區烏蘭牧騎工作條例」內蒙古自治區文化庁編、一九九七『烏蘭牧騎之路——紀念烏蘭牧騎建立四〇周年 一九五七—一九九七』二九四—二九六頁、呼和浩特：內蒙古人民出版社。
- 內蒙古自治區文化庁（編）一九九七『烏蘭牧騎之路——紀念烏蘭牧騎建立四〇周年 一九五七—一九九七』呼和浩特：內蒙古人民出版社。
- 內蒙古自治區烏蘭牧騎學會 一九九〇「內蒙古自治區烏蘭牧騎學會章程」內蒙古自治區文化庁編、一九九七『烏蘭牧騎之路——紀念烏蘭牧騎建立四〇周年 一九五七—一九九七』三四五—三四六頁、呼和浩特：內蒙古人民出版社。
- 內蒙古自治區直屬烏蘭牧騎 一九九七「為烏蘭牧騎旗幟增光添彩」《內蒙古藝術》二：二七五—二七六。
- 人民網 二〇一〇「中國共產黨大事記」《中國共產黨新聞》（インターネット）、二〇一〇年三月二七日、<http://cpc.people.com.cn/GB/64162/64164/index.html>。
- 任彥資 一九九七「烏蘭牧騎學會第二屆理事會產生」《內蒙古藝術》二二期：三六。
- 界首縣文教局教研室 一九六五「烏蘭牧騎」式耕小教師訓練班「安徽教育」一二期：二三。
- 盛平・陸天一 一九九九「浦東大地上的烏蘭牧騎」《中國婦運》六期：十八—二十。

- 童古麗珂 二〇〇一「烏蘭牧騎 還好嗎」『人民日報』一月二日。
- 王曼力 二〇〇二「句句見真情——讀『吳曉邦與內蒙古新舞蹈藝術』」『舞蹈』三期：七。
- 衛平 二〇〇五「堅持民族文化品牌，積極創造兩個效益」『實踐』七期：四五。
- 吳光華（主編）一九九九『漢英大辭典』上海：上海交通大學出版社。
- 烏蘭夫 一九五七「十年來的內蒙古」『烏蘭夫文選（上）』四四六—四六五頁，北京：中央文獻出版社。
- 央視國際 二〇〇五「陽光下的舞者——賈作光」『CCTV.com 舞蹈頻道·舞蹈人生』（インターネット、二〇〇五年四月二八日、<http://big5.cctv.com/dance/20050428/100565.shtml>）。
- 玉樹藏族自治州歌舞團 一九九七「歌舞之里」的烏蘭牧騎」『中外文化交流』二期：三三。
- 張華勝・張源 二〇〇四「家庭烏蘭牧騎」的故事」『思想工作』二期：三三。
- 張猛 二〇〇七「烏蘭牧騎走進蒙古包」『新華網甘肅頻道』（インターネット、二〇〇七年二月五日、http://www.gs.xinhuanet.com/news/2007-12/05/content_11848860.htm）。
- 中華人民共和國國家民族事務委員會 二〇〇六「回眸第一屆全國少數民族文藝公演」（インターネット、二〇〇六年八月八日、<http://www.seac.gov.cn/wy/hy/jjhm/2006-08-08/115793280306864.htm>）。

中国 における 社会主義的 近代化

宗教・消費・エスニシティ

小長谷有紀
川口 幸大
長沼さやか
[編]

勉誠出版

